

戦前の小説における片仮名の用法について

——長音の表記を中心に——

久保田 篤

一

川端康成の小説などを読んでみるとテーブルを「テエブル」と書いてあるのを見ることがつてはこのような書き方が一般的だったのかというような質問を、見たり聞いたりすることがある。確かに、例えば『雪国』に見られる、片仮名表記語で長音を含む語を、出現順にある程度挙げてみると（括弧内には初めに見られたページ数を示す。同じ語が他のページに見られることも少なくないが、ここでは省略する）、

- スチム（八頁）
- ブラット・フォウム（一四頁）
- スキイ（一八頁）
- ポスタア（三一頁）
- ウイスキイ（四三頁）
- ヴェエル（六四頁）
- カアテン（七一頁）
- クリム（八三頁）

スロオプ（一〇二頁）
 コオト（一〇七頁）
 スカアト（二二頁）
 メエトル（一三六頁）

のようであつて、長音符号「ー」ではなく、ア行の仮名が書かれている。また右に挙げた部分だけでも分かるように、「ア・イ・ウ・エ・オ」全ての仮名が長音表記に用いられている。このような長音表記は、「モオツアルト」等の例も知られており、古めかしさを感じさせる書き方であるが、どの程度広く行われていたものであるか、当時はこの書き方をするのが普通だったのかといったことは、あまり明らかにされていないようである。これが一般的であったかどうかについて判断するためには、種々の文章を調査する必要がある中で、すぐに結論を出せる問題ではないが、今回取りあえず、この『雪国』が最初に出版された昭和十二年あたりの小説を幾つか調査し、当時の小説ではどのような状況であったのか、ほんの少しではあるが様相を窺うことにしたい。

このような、長音符号ではなく母音の仮名で長音を示す書き方は、

現在では全く一般的ではなくなつたが、この書き方が慣用として残っている語が現在でも幾つかあることは、平成三年に内閣告示された「外来語の表記」の、Ⅲの3「長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。」の注1「長音符号の代わりに母音字を添えて書く慣用もある。」の例として「バレエ(舞踊)」「ミイラ」が、また注2「「エー」「オー」と書かず、「エイ」「オウ」と書くような慣用のある場合は、それによる。」の例として(エイの例はここでは省く)「サラダボウル」「ボウリング(球技)」が挙げられていることによつて、改めて認識できることではある。しかしそのような語の数は、現在ではごくわずかである。右の4語にしても、そのうちの二つは、「バレー(ボール)」「ボウリング(穴をあけること)」との書き分けが意識されているかとすぐに予想できるものである(また「ボウル」の方は「ボール」と書くことも少なくない)。このように、現在なお残つていると言える語もあるにはあるが、かつてのような書き方とは大きく異なることは今更言うまでもない。昭和二十九年の国語審議会「外来語の表記について」の(7)において「長音を示すには、長音符号「ー」を添えて示し、母音字を重ねたり、「ウ」を用いたりしない」とされたことが既に広く浸透していることになる。(なお、右に「外来語の表記」を引用したときに省いた、注2の「エイ」の方の例は、「エイト」「ペイント」「レイアウト」「スペイン(地)」「ケインズ(人)」である。これらの中には、発音もエーではなくエイのものもあると思われる。今回は、現在長音符号で書くのが一般的な語と、「カフェー」のような明らかに長音の

ものを対象にすることとした。また、この注2に続く注3の「(略)。ただし、慣用に依じて「ー」を省くことが出来る」の例として「エレベータ」「コンピュータ」「スリッパ」が挙げられている。このようなものについては、現在でも色々と議論がなされていて、分野によつて異なつていたりするようであるが、今回の考察では、同じ語が別の箇所で長音表記されていることのある場合のみ取り上げ、そうでない場合は検討の対象としないことにした。)

二

まず、当時の小説において、片仮名がどのような部分に用いられているかを、短編を中心に幾つかの小説を見ながら、概観しておく(以下、語の前後の記述等を適宜括弧を付すなどして示すこともあるが、その語が複数例ある場合、全て同じ記述があるわけではなく、ある1例の場合を示したものである。複数見られる語は、その表記の用例数を括弧内に示す。また、現在も片仮名表記が一般的な、外来語・外国語については多くは用例の所在を示すことは省略し、それ以外のものについては適宜ページ数を示すことにする。なお、前後の漢字も含めて示す場合や作品名など、旧字体が使われているが、全て新字体に直して示す。ルビは、検討対象とする場合以外は、省いて示す)。

昭和十一年の丹羽文雄の作品集『この絆』の表題作「この絆」に見られる片仮名は、

アパート(21例) エゴイスト クリーム コロンビア

コンタリート シヤツ スリッパ ソファ
 ダンスバアテイ (3例) ノック マダム
 レコード (5例) ロボット
 ヴォーガン・ヴオグ ジヤルダン・デ・モード
 チチリツ・チチリツ・チントンチレトツ (と三味線に移るのだ
 つた) (五二頁)

のように、現在でも片仮名表記が一般的な、外来語や外国語の表記
 および擬声語に用いられたものが殆どを占め、これ以外には、次の
 ような、いわゆる捨て仮名と接尾語「つ」が見られた。²⁾

二タ棹の衣裳箆箭 (五頁) 二階の二タ間 (七頁)
 八ツ手 (一九頁) 三ツ分も大きかつた (九頁)

同じ昭和十一年刊行の志賀直哉『万暦赤絵』の「万暦赤絵」でも
 基本は、

アラスカ (2例) カール (した柔らかい毛)
 グレーハウンド コロー (の小さい風景画) (3例)
 「デイオゲネスとアレキサンダー大帝」 ハルビン
 (昔の絵では) フラゴール (のもの) プウルデル (の窺跡)
 ブルテリア (に似た犬)

マルティス・テリア (は古い歴史を持つた犬)
 (玄関へ) ドヤく (と出迎へた) (四一頁)

のように外来語や外国の人名・地名と、擬態語で、右と同じく捨て
 仮名も、

一ト口に (二八頁) 一ト桁下 (三五頁)

とあり、これ以外に、

(所謂) ニウ (が見えている) 「陶器の貫入」 (三五頁)
 という、特殊な語の表記に用いられた者が1例あった。

最初に長音表記の例を示した、昭和十二年の川端康成『雪国』単
 行本の「雪国」の片仮名も、全て示してみると、

アラン ヴアレリイ ウイスキイ ウエエル
 カアテン カフェ ガラス クリイム コオト
 コップ ゴム (2例) スカアト スキイ (22例)
 スチイム (八頁) スティム (一一六頁) ストオヴ
 スロオプ ダリヤ チヨツキ トンネル ネル
 ハイキング バラック ハンカチ
 フオウム (一一五頁)
 プラット・フオウム (二四頁) プラットフオウム (二一八頁)
 プログラム ベル ポスタア マツチ マント
 メエトル ラツセル (2例) ロシア
 (土地の言葉で) ハツテ (といふ) (二六四頁)
 ハツテ (を作つて) (二六四頁)
 ハツテ (が組んであつた) (二六五頁)
 となる。これも殆どが外来語および外国の人名・地名であり、他に
 は右の最後に挙げた「ハツテ」(稱をかけて干す木。はで木)とい
 う特殊な語の表記が1語3例あるだけである。
 昭和十三年の片岡鉄兵『思慕』の中の「思慕」には、
 アパート (4例) カフェ ジャーナリスト

ダンス・ホール テープ(2例) ベット
 (心の中に) マリヤ ルウス(な生活) レストラン
 カツと燃え立ちさうな(七五頁)

のように、やはり外来語および外国の人名と、擬態語のほかに、

まアお掛けなさい(六九頁)

まアどうしませう(六五頁)

まアいつ来たんです(六九頁)

など、副詞および感動詞の「まア」の片仮名「ア」表記が全部で4例見られる。

同じ昭和十三年に刊行された堀辰雄『風立ちぬ』では、

アトリエ アルプス イデエ ヴエランダ(7例)

カトリック カンワス クリスマス コスモス

コップ サナトリウム(32例) センシユアル

テラス ドア トランク ノオト(5例)

パセテイツク バルコン(21例) パレット・ナイフ

ヒイタア ブラウス フラスコ フレンチ扉(3例)

プラツトフォーム(2例) ベッド(23例)

ホテル(5例) ライラック ランプ リノリウム

リボン リルケ(2例) レクキエム 鎮魂歌

レントゲン 父親

ギヤツと鋭い鳥の啼き声(一七三頁)

ギヤツ、ギヤツと啼き立てた(一七四頁)

となっていて、外来語・外国語等と擬声語のみである。

もう一つ同じ昭和十三年の中山義秀『厚物咲』からも表題作「厚物咲」を見ると、

イムボテント ゴム風船 システム スープ(2例)

ヒステリイ ブウム フロック フロックコート

ブローカー(4例) モンペ(3例)

ブンと臭ひのくる(三七頁)

ペコペコお辞儀をしながら(五六頁)

のように、外来語と、片仮名表記が慣用になっていたと見られる「もんぺ」と、擬態語のほかに、右の作品と同じく、

まア重傷を負つて帰つて来た身体だから(四九頁)

という「まア」の長音の「ア」表記が見られるが、これと同様に長音を片仮名で示した、

爺イ(一五頁)

や、擬態語の促音を片仮名で示した、

しツと追つてみたが(六六頁)

も見られ、

ザツトこんなものだ(七頁)

という副詞の表記にも片仮名が用いられている。⁽³⁾このほかに、

(こんな) シツコイ(爺イつたらありやしないよ)(一五頁)

カマをかけてみた(二〇頁) ムキになつて(二三八頁)

という例も見られ、これら(特にカマやムキ)は、非外来語の片仮名表記の一類⁽⁴⁾として現在でも書かれるものと言える。

以上のように六つの作品では、使われている片仮名は、江戸語以

降の、多くの人が読む文章に用いられる片仮名用法と同じ⁽⁵⁾であり、「まア」など語の一部のみを片仮名にすることは現在ではやや少ない等、程度の違いはあるものの、文章中で使われる部分は、基本的には現在と同じであると言える。そのような中で、長音を母音字で示す書き方は、現在との違いとしてやはり目立つ表記である。ただ、右にざっと見ただけでも分かるように、長音符号が使われている小説は少なくない。全ての長音を「ー」で示す作品が無く、最低でも1例、必ず母音字を用いた例が見られる点は時代を感じさせるが、右に見た六作品では、うち五つの作品に長音符号が見られ、母音字のみの作品は『雪国』だけである。このように、当時も長音符号の使用が一般的であり、母音字の使用も必ず見られるが作品あるいは作家によってその使用程度が異なるということなのである。そこで以下は対象を長音の表記に絞り、もう少し調査する作品を増やして、当時の実態を探ることにする。

三

『雪国』には全て母音字で書かれるという顕著な特徴が見られたので、川端康成の他の作品も少し見ることにしたい。

昭和五年の『浅草紅団』には多くの長音表記が見られる。一応、主に最初の例が見られた順に、列挙しておく(用例数は、別表記がある場合は1例でも示し、そうでない場合は複数のときのみ示す。

また、「ピアホオル」「ミルク・ホオル」は「ホオル」に、「モダアン」「モダアン・ボオイ」「モダアン・ガアル」「マネキン・ガアル」

「イツト・ガアル」「ステツキ・ボオイ」「ホテルのボオイ」は「モダアン」「ガアル」「ボオイ」にまとめるなど、実際の用例とやや異なる示し方をする場合もある)。

タイプライター

- チャアルストン (2例) (チャルストンも2例)
 カジノ・フオオリイ (1例) カジノ・フオウリイ (5例)
 レヴィウ (17例) レヴユウ (1例) ハアモニカ (6例)
 スカアト (8例) コオルテン (3例) ビイル (3例)
 ホオル (2例) ボオト (6例) コオス オオル
 コンクリイト (26例) ゴウカイヤ (5例) 一ダアス
 メリイ・ゴオ・ラウンド (4例) モダアン (4例)
 マアチ ガアル (5例) アルコオル シイ・ソウ
 バリイ ユウモア (2例) スピイド オオケストラ
 ボオイ (3例) ブラット・フオウム
 セエラ・ズボン (1例) セイラ服 (1例)
 イイトン・クロツプ ビロウド スネエク・ウツド
 コオト フィナアレ
 エレヴエタア (5例) エレベエタア (1例)
 メエトル (3例) ベビイ ゴウゼエ 一ペエジ
 ズロオス (3例) フルウツゼリイ チウインガム
 チヨコレイト コオヒ (5例) ソオダ水
 アイスクリイム ケエキ ライスカレエ
 ロオルキヤベツ ビイフシチエウ トオスト・パン

スワロオ・タイプ ハンマア ジヤン・コクトオ
 ストオヴ マス・ゲエム ワアリヤ ミラア
 ビイドロ ダニレフスキー(4例) ワン・ピース
 デバアト チャアリイ
 シヤンゼリゼエ ジブシイ・ダンス スタルスキイ
 ルボウスキイ(6例) タアマラ、ミイラ、ワアリヤ
 ロオラスケエト ウオタア・サアカス
 シヨウ ボオドビル ヨウラン
 オオシヤン・ダンス カアポオイ・ダンス
 ビイス カアド 松岡ヘンリイ(2例)
 ニユウス(2例) レデイ・バアド
 セエヌ河 テエムス河 ダニユウブ河 イザア河
 ユニフオウム スポオツ・シヤツ

このように、この作品でも全て母音字で長音が示されている。これらは、娼婦をいうゴウカイヤと洋服の意のヨウラン以外は、現在であれば長音符号を用いるのが一般的である。なお、右のほかに、感動詞「ちええ」の片仮名表記が1例あった。

チエエ 残念な(127頁)

これより前に刊行された『伊豆の踊子』では、「白い満月」「驢馬に乗る妻」「十六歳の日記」「五月の幻」「伊豆の踊子」に例があるが、作品を分けずにまとめて示しておく。

テエブル(6例) リユシイ(2例) リユシイ・ボヴレエ
 コウカサス アルコオル スエエデン カラア

コオト エレヴエタア(3例) ステイシヨン
 タクシイ カアテン
 これ以外に、「驢馬に乗る妻」には
 レール(2例)

が、また「伊豆の踊子」には、
 カオール(と云ふ口中清涼劑)
 があり、長音符号表記も少し見られる。

更に前の『感情裝飾』(これも個々の掌編を分けずにまとめて示す)では、

ポオイ テエブル イタリイ(2例) ポオル紙
 スクリイン シイン キユウ「玉突き」(2例)
 ゲエム(3例) アヴァレイジ(2例) ヨウロツバ
 ジブシイ

のようにやはり母音字表記の方が多いが、

アルコオル タクシイ(2例) ローマ
 珈琲店

と、少ないものの長音符号表記も見られる。

このように、川端康成の小説では、長音は母音字で示されるが、初めは少し例外もあったようである。昭和になって母音字表記専用となっていたことが窺われる。

前節で見た作品の中では、堀辰雄『風立ちぬ』も、長音符号よりも母音字の方が多かった(ただし長音のある片仮名表記語が少なく、「イデエ」「ノオト」「ビイタア」「父親」^{コフクダ}に対して「プラツトフオー

ム」1語という差に過ぎないが)。この堀辰雄も、もう一冊、『菜穂子』を見ておく。「菜穂子」(こちらには、「ビルディング」(一一頁)、「スウェタア」(四四・四五・四六頁)、「ラツセル」(五六頁)、「ベッド」(六九・七〇頁)、「ズック」(七〇頁)、「シユウズ」(一一三・八頁)のように小書きの「イ・ウ・エ・ツ」が見られるので、字の大小もそのまま示す)には、

スウェタア(4例) クレゾオル(2例) スリツツバア
 オウヴァ・シユウズ ジヤアマン・ベエカリ タクシイ
 プラットフォーム(9例)

と、

ストーヴ(4例)
 の2語が長音符号表記である。「楡の家」(こちらには、「ヴェランタ」(二八〇頁)、「ステツキ」(二八七頁)、「ベッド」(二八九・一九〇頁)のように、小書きされていない)では、
 テイ・ペアテイ テエブル ボオイ(2例)
 スウブ(2例) レエンコオオト マントル・ピイス
 に対して、

ミツシヨシ・スクール(3例)
 1語がある。このように、堀辰雄も母音字表記が基本と言えそうであるが、長音表記が少ない割には長音符号表記が必ず少しあるようである。

前節では挙げなかった作家では、伊藤整も母音字表記が多いよう

である。昭和十四年の『街と村』(この作品も小書きが見られるので区別して示す)を見ると、

ボオイ(2例) ロオプ(2例) レエス カアテン
 クウプリン リイザ(用例多数。人名) コンクリイト
 ノオト ボマアド ロピンソン・クルウソウ
 レオボルド・ブルウム ビヤホオル ズロオス(2例)
 バアル・ホワイト パアマネント ドウズ氏
 テエブル(4例) ポスタア カンヂンスキイ
 ヴェルレエヌ ベートオヴェン スクリイン(4例)
 モオニンク ビイル スキトビイ
 レコオド ベアトリイチエ

のように母音字表記がされている。ただし、「コンクリイト」(二五・四六頁)には「コンクリート」(五六頁)が、「ビヤホオル」(九四頁)には「ビヤホール」(四九頁)が、「テエブル」(六八・一〇三・一〇五・一〇六頁)には「テーブル」(九七・九八頁)が併存している。また「ベートオヴェン」にはもちろん長音符号表記も含まれている。この「ベートオヴェン」と、右の、
 コンクリート ビヤホール テーブル(3例)
 以外の長音符号表記は、

フオーク チェーホフ ツルゲーネフ リツフィー河畔
 ウエーヴ

である。もう一冊、昭和十五年の『霧氷』(これも小書きがある)では、

スキイ(百例以上) レヴェウ・ガアル コオス(6例)
 ソオセージ ポスタア ヨオロッパ(3例)
 スチイム スロオプ バンガロオ シュプウル
 ルウト スタアト ボイラア コンクリイト
 シイズン シュナイダア シイル(3例) プレイキ
 リイダア ドオナツ(2例) スエタア(3例)
 コオチ ゴオガン テエブル プレーボオル
 カアテン ウイスキイ ポオカア メンバア
 エキスパアト コオト スウツ
 エネルギイ ボイラア
 などの母音字表記が見られる。ただし、例の非常に多い「スキイ」にも1例だけ「スキー」(八〇頁)があり、「ドオナツ」(九二頁)にも「ドーナツ」(九頁)がある。また、
 テーブルを囲んで思ひ思ひに座を占めると、のり子はテエブル
 掛けに(一一七頁)
 のように、近接して両表記が存在する箇所もある。長音符号表記もある「ソオセージ」「プレーボウル」と、この「スキー」「ドーナツ」以外(「テーブル」は数が多いので左に加える)にも、
 プラットフォーム(9例) スポーツ(5例)
 ホームスパン ツーア(2例)
 ストローヴ(30例) ライスカレー テーブル(8例)
 シュプウル(2例) レコード(6例)
 シュテムボーゲン(2例) レース

リレー ヒューマニズム オーヴァー オーヴァー
 グループ(美しい) フォーム
 があり、母音字表記の方が多いものの、この『霧水』では長音符号表記も多くなってきたのが見て取れる。
 以上は、作家によって長音符号表記の混じる割合がかなり異なるものの、母音字表記の多い小説である。なお、堀辰雄の作品における、例外の長音符号表記として、「プラットフォ(フォ)ーム」が目立つ語として挙げられる。これに、伊藤整『街と村』の例外の、「ツルゲーンエフ」以外の語、「フオーク」「チエーホフ」「リッファイ」「ウエーヴ」を合わせると、全て母音字表記した場合に同じ仮名が続くことになるものであることが分かる。「フォオム」「フォオク」、また小書きと大書きの違いはあるが「フォオム」「チエエホフ」「リッファイ」「ウエエヴ」と、同じ仮名が連続することを避けるために、例外の長音符号表記が選ばれた可能性があると考えられる。ほぼ母音字表記専用の川端康成には、「フォオリイ」「オオル」「オオケストラ」「ヴェエル」「オオシヤン」などの同字連続が見られるが、複数の用例の見られる語の場合は、「フォウリイ」の方が数が多かったり、「プラットフォウム」であったりするように、「オ」ではなく「ウ」になっていることから、同字連続を避ける意識があったと見られる。

四

前節では、母音字表記の多い作家を見たが、次に、長音符号表記

の多い作家を見ることにする。まず丹羽文雄の『この絆』の表題作以外の作品の例を、作品別にせずに合わせて示しておく。基本である長音符表記は、

- アパート (30例) タイプライター カーテン (7例)
 - テーブル レヂスター (2例) オーバー (3例)
 - カーブ マスター (2例) クリーム (2例)
 - アフタヌーン アズレー洋装店 ソーセージ
 - ビール カバー バター (3例) カウンター
 - ボーイ (2例) アブノーマル シミーズ
 - ホール (2例) コールド (クリーム) コンクリート
 - チーズ ガード (3例) ポーズ リバーソセージ
 - オーガンジ
- である。これに対して母音字表記は、右のように長音符表記もある。「オーガンジ」と、現在でも母音字表記される数少ない語である、
- ミイラ取りがミイラになつた (二五七頁)
- の「ミイラ」と、
- バアテイ (3例) バアテン (7例)
- の4語のみである。同じ丹羽文雄の昭和十六年『中年』も見ると、
- イミテーション (2例) アパート (10例)
 - アブノーマル (2例) マントルピース サービス (6例)
 - ハイヤー コート スポーツ デパート
 - カフェー ジャーナリス ホーレン (さん)

- バアテンダー イーヴニング アフタヌーン
 - アルコール (2例) モード ブランデー
 - レコード (2例) ビール カウンター
 - シモンクリーム ガーゼ コキユウ スウエター
 - シミーズ タイプライター ジョーゼット
 - マスター (6例) ガード モットー チャー公
 - デパート (2例)
- が長音符表記である。右に見るとおり母音字表記もある「バアテンダー」と、

バアテン (3例) アイシヤドウ

のみが例外の母音字表記である。丹羽文雄は特定の語だけ母音字表記をしていると見られ、その語は現在より少し多いものの、比較的今と近い表記であることが分かる。

- 中山義秀『厚物咲』の表題作以外の作品では、
- ホーム (3例) グループ (3例) サラリー (3例)
 - コース チョーク ヒータア
- が長音符表記で、右の最後の「ヒータア」と、
- ヒステリイ カラア
- に母音字表記が見られる。この作品集では、語の一部の音の、または語が融合した場合の一部の音の表記に用いられた片仮名が、第二節にも示したように多く、そのうち長音表記は表題作以外でも、
- さア (一〇二・二〇七・二二三頁)
 - まア (一一六・一八〇・二二四頁)

人殺しイ (二三五頁)

お母アさん (一三五・一三九・二二三・二三四頁)

(助けてイ (一三五頁))

はア (一七九・二四三・二五九頁)

なアに (一九三頁)

ぢやア (二〇六・三三六頁)

ばたアんと (三一八頁)

びつくりすらア (三三三頁)

のように見られる。なお、「お母アさん」に対して、「お父うさん」(二二四頁に3例) はこのように平仮名で長音を示している。同じ中山義秀の昭和十四年『小説集「いしぶみ」』も、「碑」とそのほかの作品も合わせて片仮名の長音表記を示すと、

コース (2例) 「ウオー」(と獣の唸るやうな声)

チャーンとした アルコール (2例) テープル (4例)

ストーヴ (2例) パーセント (2例) ライスカレー (2例)

コート ルビー ホール ボーイ (4例)

カッフエー (3例) ルーズ テーマ コーヒー

であり、全て長音符号表記となっている。

昭和七年の横光利一『寝園』では(フランス語を写している部分を除く)、

コテーヂ ロビー (5例) ケースメント (2例)

バートレット テープル (3例) ブルイヤール

スリーキヤスル (2例) ボーイ ウイローカーフ (の靴)

バーデー (7例) ランカスター (6例)

ホームスパン (2例) サツクコート (2例)

クレー (9例) ピークト・ラベル

ハリントン ポーレ (4例) オークルジョン

グループ ブルオーバー リーゲル

ドーシアボントーン ケース (5例) グリーン (4例)

オール アムール ソファア ホール (2例)

メンバー (5例) ウインチエスター (2例) ターン (4例)

レール ユニフォーム (10例) モダンガール

サンマアハウス パントリイ コクトオ (2例)

に長音符号表記が見られ、
が母音字表記になっている。なおこのほかに、両表記の見られるものとして、紙の「ペイパ」(七頁)「ペーパ」(二四五頁)と、犬の名「リュウ」(六四・三〇八頁)「リユー」(三二一・三二二頁)がある。この作品にも、『厚物咲』と同様に「まア」「さア」「やア」「いやア」「はア」「あらア」「まアまア」「かまアない」などが多く見られ、漢字の下に片仮名を添える、

何アに (一一九・一七三頁)

も見られる。

志賀直哉『万暦赤絵』の表題作以外の小説についてもまとめて示すと、

アイスクリーム カッフエー カッフエー

モルナル ヨーラン ベースボール グラープ

ドーム アーク燈 ハンマー コーヒー(3例)
 ボーイ セッター プラットフォーム
 などの長音符号表記が見られ、

アンドレ・ジイド
 が例外となる。

第二節に挙げなかった作家の作品としては、昭和十四年の芹沢光治良『愛と死の書』も基本的に長音符号表記である(この作品も片仮名の小書きが行われているのでそのまま示す)。

テーブル ジュネーヴ(6例) グループ
 サナトリウム ニュース (スキスの) レーザン(4例)
 ヨーロッパ(4例) セーター(2例)
 ニューグランドホテル

ストープ(10例) アパート プラットホーム(5例)

ホーム(2例)

オートビル タクシー ベール ピューリタン

カーキ色(2例) スケジュール カラー ガード

サイダー(3例) ビール(2例) チョコレート ロビー

ニッカー ローマ

のようであって、母音字表記は、現在でも母音字で書く「シユウマイ」とお経の「ナムミヨウホウレンゲキヨウ、キモンインホツシンジヨウブツ」、固有名詞の「アスタアハウス」(2例)「アスタア」(3例)のみである。同じく長音符号表記が基本の『寝園』では、「シア」「まア」等が多かったが、この作品では、終助詞「なア」が

3例(一五・一九・二三頁)見られるだけであり、地名の「スキス」や「サナトリウム」というの除けば、他の作品で「スエタア」「ストウヴ、ストーヴ」「プラットフォウム、プラットフォーム、フォウム」等が多かった「セーター」「ストープ」「プラットホーム、ホーム」を見ても、また拗音・促音の場合の小書きが行われている点からも、『愛と死の書』は、片仮名表記という面では、当時としては現在の書き方に近い表記が行われている小説だったと言える。

なお、ここではもう全ての語を挙げることを省くが、高見順『如何なる星の下に』でも圧倒的に長音符号表記が多く(異なり語六〇語以上)、例外は、用例数の多い語として「レヴィウ」と「シヨウ」、その他「シユウマイ」と人名の「マルロオ」「エドガー・ポオ」「スタンダール」「ジャン。ジャック・ルウソオ」くらいである。

五

長音符号表記が多いが、母音字表記も、前節の作品のように例外的ではなく、ある程度見られるものとして、阿部知二の作品の例を示しておく。昭和十四年の『街』(小書きと大書きが混在しているので区別して示す)では、

ウイスキー(5例) クリーム(2例) サービス

スキー スーツ(2例) ラクトーゲン

スカート ガーゼ(2例) ボーイ(4例)

アパートメント(7例) アパート(6例)

スケート(41例) スピード コーチ

ルーマニア レコード(8例) スマート(3例)
 スカート(2例) マーク(2例) ビール(9例)
 何ダース マーキエロ アイスクリーム(2例)
 チューブ モットー ヘーゲル
 カーキ色 サーヴィス アルコール ワンピース
 ポート(5例) スポーツ コンシユーマ
 ボマード(3例) グループ(2例) イデオロギー
 モダンガール シューベルト ドーナツ
 ヒステリー エテユード キューピッド ノート
 テーブル(2例)
 ピューピューと吹く
 のように長音符号表記が多いが、
 ウエイヴ スタア(2例) ポスタア(2例) レエス
 シヨオル ホッケイ プロウチ モオタ・ポート(4例)
 セイルスマン デモクラシイ デリケイト トオスト
 ランデヴウ ポオチ(3例) レウマチ
 のように母音字表記もある程度見られる。なお、「ウイスキー」に
 は「ウイスキー」(1例)も、「ポスタア」には「ポスター」(1
 例)も、「ボマード」には「ボマアド」(1例)もあつた。同じく阿
 部知二のやはり昭和十四年の『風雪』においても、
 ボーイ(4例) ヨーロッパ(10例) デザートコース
 フォーク スポーツ(8例) レーニン パストゥール
 ボオドレール ハーデンング シーメンズ事件

ジャーナリスト シアーナリスト ローマ パッター
 カンと テープ スケート(2例)
 ジュリアス・シーザ コート ノート(2例)
 テニスコート(2例) スープ パーセント(2例)
 ジャーナリズム(4例) スーツ スカーフ
 プラットフォーム ウイーン(2例) ビューティフル
 ドン・キホーテ
 などの長音符号表記がある一方で、右の「ボオドレール」のほかに、
 レウマチス レウマチ カイザア スロオガン
 イデオロギイ(5例) ロオマ (イエスカ) ノウ(4例)
 デモクラシイ(8例) セイクスピア シイザア
 エドガ・ポウ オオトバイ ボオイ(2例)
 エネルギイ クウ・デタ ストウウ スタア プレイ
 カアネシヨン モオニンング トオスト カアキ服
 などが母音字表記されている(両表記あるものもここではそれぞれ
 のところに示した)。このように、母音字表記の方が少なめではあ
 るが、両方の表記を併用する作家もいたことが窺える。語によつて
 どちらで書くか大体決まっているようでもあるが、同じ語が「ウイ
 スキー」「ウイスキー」(更に長音のない「ウイスキ」も2例あり)、
 「ポスタア」「ポスター」、「ボマアド」「ボマード」、「ボーイ」「ボオ
 イ」、「シーザ」「シイザア」、また両表記の差ではないが「サラリー
 マン」(3例)と「サラリマン」(2例)などもあり、一語に複数の
 表記が行われているものも散見する。

また、昭和三年の作品であるが宮本百合子『伸子』も同様で、やはりもう全ての語を挙げることは省くが、「アイスクリーム」「ウキスキー」「シート」「コンクリート」「タクシー」など長音符号表記が六〇語以上と多い一方、「タイプライター」「カラア」「カアキ色」「ストウブ」「アパアトメント」「ゴウル」など母音字表記も三〇語以上見られる。また「ノート」「ノオト」「ノウト」「レース」「レイス」のような混在も少なくない。

六

今回調査を行った小説は、特に何らかの方針があつて選択したものではないのだが、幾つかの作品を見ただけでも、当時、母音字表記が広く一般的であつたというわけではなく、作家・作品によってかなり異なることが分かつた。今も人気のある、川端康成や、今回は対象としなかつたが太宰治などは、母音字表記をすることが多いため、広く行われていた表記法のように感じてしまうとところがあるが、母音字表記専用と言えりような作家や作品は、今回の不十分な調査による推測ではあるが、必ずしも多くはなかつたと見られ、母音字表記が基本の文章でも、程度に差はあるものの長音符号表記が混在した。しかしまた、長音符号表記専用という作品も少なく、殆どの場合に（現在では母音字表記しない語を）母音字表記した例が見られるのも、当時の特徴と言える。既に明治時代に長音符号表記が普及して⁽⁸⁾いたことが知られているが、戦前の小説において、このように母音字表記がある程度（作家によっては殆ど専用にあて）好

まれた理由は何なのか、いわゆる棒引き仮名遣いに対する抵抗があつたことと関連するか等、考えるべき課題は少なくない。しかし今回はまず手始めとして幾つかの小説の実態を窺うことを目的とし、これまで見てきたように、川端康成・堀辰雄・伊藤整のように母音字表記が基本の作家と、横光利一・丹羽文雄・芹沢光治良・高見順のように長音符号表記が基本の作家と、阿部知二・宮本百合子のように長音符号表記が多いものの母音字表記も少なくない作家がいたというように、多様であつたことが分かつた。母音字表記が基本の文章でも、同じ母音字が連続することになる場合は、連続を避けてなのか長音符号表記にする傾向が窺われた。一方、長音符号表記が基本の文章でも、著名な人名には母音字が慣用として使われやすいこと、また感動詞等の語末の長音は母音字で示す等の傾向が見出された。

ところで今回は片仮名表記を検討の対象としたため示さなかつたが、比較的多くの作品に、平仮名の下でも「ー」（時に「——」の場合もある）を用いる、

- ぷーんと（『伸子』四三八頁）　ぞーつとした（同、四四四〇頁）
 わーつ（同、四五二頁）　もーつと（同、五〇〇頁）
 うわーつと（『寝園』七五頁）　えーえ、どうぞ（同、一〇四頁）
 ふーむ（同、二五七頁）　え——え（同、三四三頁）
 ひいーと（『この絆』二〇三頁）　どーんと（同、三九八頁）

さあ——ツといふ（『万曆赤絵』一九九頁） ふーむ（同、二二二頁）

前へーおいつ（『子供の四季』四頁） 突込め——ツ（同、同）

へいたいさーん（同、五頁） あ——あ（同、一五二頁）

「うーん」「うーん」と（『街』一七〇頁）

「ふーん、ふーん」と（同、二四五頁）

おーい、ピイルをくれ（『街と村』九七頁）

うーん（『如何なる星の下』九頁） ふーむと（同、五六・五七頁）

ふーん（同、一〇六頁） おいなりさーん（同、一八七頁）

はーい（同、一九四頁） へーえ？（同、二六五頁）

のような例が共通して見られる。これらは当時の小説の表記の特徴の一つと考えられる。⁹⁾「えエえ、いいの」（『寝園』七八・七九頁）のような例も少しあるが、右のような位置には長音符号「ー」が用いられたと見られる。これらや、両表記の混在などの点から、当時は、現在に比べると、片仮名母音字と長音符号とが近いものとして意識されていたとも考えられる。このように長音表記に限っても興味深い点が見出されるので、戦前の表記法に関して追究すべき問題は少なくないと言える。

本稿は二〇〇八～二〇一〇年度成蹊大学研究助成（研究テーマ「戦前」の日本語・表記・語法・文体からの多面的考察）をうけてなされた研究成果である。

注1

1 今回調査した本は以下のものである。まず、川端康成『感情裝飾』（大正十五年、金星堂）・『伊豆の踊子』（昭和二年、金星堂）『浅草紅団』（昭和五年、先進社）・『雪国』（昭和十二年、創元社）、宮本百合子『伸子』（昭和三年、改造社）、坪田譲治『子供の四季』（昭和十三年、新潮社）、堀辰雄『風立ちぬ』（昭和十三年、野田書房、高見順『如何なる星の下』（昭和十五年、新潮社）は、ほるぶ出版の複製本（名著複製全集、近代文学館）による。その他は、横光利一『寝園』（昭和七年、中央公論社）、丹羽文雄『この絆』（昭和十一年、改造社）『中年』（昭和十六年、河出書房、志賀直哉『万曆赤絵』（昭和十一年、中央公論社）、中山義秀『厚物咲』（昭和十三年、小山書店）『小説集「いしぶみ」』（昭和十四年、創元社）、阿部知二『街』（昭和十四年、新潮社）『風雪』（昭和十四年、創元社）、伊藤整『街と村』（昭和十四年、第一書房）『霧氷』（昭和十五年、三笠書房）、片岡鉄兵『思慕』（昭和十三年、竹村書房）。

2 平仮名と漢字を主とする文章の中に、このような捨て仮名や接尾語「つ」の表記として片仮名が一般的に見られるようになったのは、江戸戯作からのもので、坂梨（一九八九）には、談義本・黄表紙・洒落本の主要作品と『南総里見八犬伝』『修紫田舎源氏』『浮世床』『春色梅児誉美』の例（江戸前期の近松浄瑠璃本の例も）が多く挙げられており、江戸語の様相を概観することができるとしている。黄表紙については、久保田（一九九九）で更に幾つかの作品の例を示した。散文作品ほどは片仮名の使用が多様ではない。『柳多留』でも、活用語尾と捨て仮名が片仮名の使用箇所であることが山田（一九七二）で指摘されており、現在では殆ど廃れていることを考えると、このような表記は、江戸語的な表記であるとも言える。

3 以上のような長音・促音、またこの二作品には例がないが撥音といった、語などの中の特長音の部分や、副詞が、片仮名表記されるのも、江戸戯作に多く見られるもので、種々の作品の例が坂梨（一九八九）に、黄表紙の他の例は久保田（一九九九）（二〇〇二）に、『浮世風呂』の例は土屋（一九八〇）に挙げられている。

4 このカマやムキは、土屋（一九七七）が漢字表記と片仮名表記で意味

が異なる例とするもの、中山(一九九八)が、漢字表記の第一義でない場合などと指摘しているものに当たると言える。

5 土屋(一九八〇)に現代の片仮名用法に『浮世風呂』までさかのぼれるものがある点、岩淵(一九八二)に『浮世風呂』の片仮名使用が明治期の小説にも現代語にも同様の使い方が少なくない点などが指摘されており、江戸語以降の片仮名使用は大きく見れば同質であると見られている。

6 このほかに、誤植と見られる「エレヴェアタ」(一一三頁)がある。

7 既に示したように『浅草紅団』にもこの「レヴィウ」が多く見られるので、この表記が浅草では慣用となっていたと見られる。

8 例えば、貝(一九九七)に示されている例が、「ミイラ」以外は長音符号が用いられていることから窺える。

9 現代の小説にも見られる(例えば岩淵(一九八二)が示す田中康夫『なんとなく、クリスタル』の「すごい」の例の中に「すごーく」がある)が、現在では多くの作家に共通して見られる表記とは言い難いものになっていると思われる。

参考文献

- 岩淵 匡 (一九八二)「片仮名の機能の歴史」(講座日本語学6 現代表記との史的対照)明治書院
- 貝美代子 (一九九七)「国定読本の外来語表記形式の変遷」(『国語論究第6集 近代語の研究』明治書院)
- 久保田篤 (一九九九)「黄表紙の片仮名」(『国語と国文学』第七六卷第五号)
- (二〇〇二)「江戸時代後期の平仮名・片仮名について」(国立国語研究所編『日本語の文字・表記—研究会報告論集—』)
- 坂梨隆三 (一九八八)「江戸期戯作の片仮名」(『日本語学』八卷二号)
- 土屋信一 (一九七七)「現代新聞の片仮名表記」(国立国語研究所編『電子計算機による国語研究Ⅶ』)
- (一九八〇)「『浮世風呂』の片仮名表記語」(近代語学会編『近代

語研究 第六集』武蔵野書院)

中山恵理子(一九九八)「非外来語の片仮名表記」(『日本語教育』九六)

山田俊雄(一九七二)「近代・現代の文字」(講座国語史2 音韻史・文字史)大修館書店)

(くぼた・あつし 本学教授)